

万が一 COVID-19 に感染していた場合—山でのリスク—

—国際山岳医千島先生の個人的見解としてのアドバイス—

1) 入山後に発症し重症化する危険

今回の COVID-19 は、感染していても無症状の人がある一方、発症後数時間で酸素投与や呼吸器が必要になる場合がある。なにも自覚症状がなくても入山後に発症し急激に悪化する可能性がある。

2) 遭難時の救助の困難さ

COVID-19 と関係なく、怪我や体調不良で遭難したとしても、現在ではその人が新型コロナウイルスに感染していないという保証はなく、感染している可能性を考えての救助になる。原則としてヘリ救助は行いにくく、地上からの救助者も感染のリスクを考えなくてはならない（万が一、ヘリのパイロットが濃厚接触者になれば社会的影響は非常に大きい）また、たとえヘリ救助が行われたとしても、天候や場所によっては、数時間から一晩以上の現場での待機が必要になる。

3) 標高が高く低酸素になる

標高 3000 メートルで平地の 7 割の気圧、標高 1800 メートルでも平地の 8 割の気圧であり、呼吸器疾患の症状がより悪化しやすい。

4) 宿泊が伴えば、山小屋・テント泊のいずれも三密の状態を免れない。

十分な水が確保できず手洗いなどがしにくい。ひとりの無症状の感染者がいれば、全員に感染が広がる可能性が高い。

5) 登山口までの移動に伴う感染の危険

公共交通機関を利用することはもとより、車に乗り合わせての移動でも三密は避けられず、感染拡大の可能性もある。また、登山口周辺の住民のリスク・不安も考慮すべき。登山口周辺は医療過疎地域で高齢者が多い可能性が高い。

6) マイクロ飛沫による感染の可能性

登山やジョギングなど荒い呼吸をしているときは、大声で話しているときと同様に周囲にマイクロ飛沫を飛ばしている可能性がある。近距離で長い時間登山を続けたり、多くの登山者とすれ違ったりしていると、マイクロ飛沫による感染の危険が高まる。